

# 17～19世紀の露清外交と媒介言語

柳 澤 明

はじめに

1. 初期の状況
  2. 往復文書の翻訳システム
  3. 翻訳者の養成
  4. 満洲語の時代
  5. 接壤地帯の言語状況
- むすび—— 満洲語から漢語へ——

## はじめに

清とロシアの両帝国は、17世紀の最初の接触以来、曲折に富む外交を繰り返して広げた。清側から見た場合、ロシアとの関係は、近隣のごく限られた国や政治勢力との関係を除けば、異例ともいえるほど複雑・濃密なものであった。当然ながら、そこでは相手方の意図を的確に把握し、自らの主張を確実に伝えることが必要となる。まったく異なる言語世界に立脚する両国は、いかにしてそのようなコミュニケーションを成り立たせていたのだろうか。

本稿の目的は、上のような問題意識を基礎として、17世紀から19世紀中葉までの両国関係における媒介言語と翻訳の推移を概観するとともに、今後検討を進めていくべきいくつかの課題を提示することにある。いわば研究序説に類するものであり、個別の事象に対する実証的解明には踏み込めていない面があることを、あらかじめお断りしておきたい。

本稿の内容に関わる諸問題については、従来、ロシア正教北京ミッシェンの活動、あるいはロシアにおける中国学の発展史に関する研究の中で、言及がなされている例が多い。代表的なものとしては、ウイドマー『18世紀の北京におけるロシア伝道団』[Widmer 1976]、スカチコフ『ロシア中国学史』[Скачков 1977]、蔡鴻生『俄羅斯館紀事』[2006]等が挙げられよう。ただし、いずれも媒介言語や翻訳の問題に特に焦点を当てたものではないため、なお考究の尽くされていない点も多く残されている。

## 1. 初期の状況

### 1-1. 最初の接触

清とロシアの接触は、1640～50年代に、アムール川流域での紛争と、モンゴル経由で

の使節往来という二つのフェーズで始まった。前者においては、少なくとも初期の段階では、本格的な外交交渉と呼べるものは生じなかったが、後者に関しては、交渉の主な媒介言語はモンゴル語であった。たとえば、1656(順治13)年に北京に到来したロシア使節バイコフ(Ф. И. Байков)の場合、通訳は次のような方法で行われた。

中国語を知る者は、大使〔バイコフ〕<sup>1</sup>のもとにはいなかったが、アブライ所属のブハラ人(бухаретин)であるイルキ=ムツラ(Ирки-мулла)はモンゴル語を話した。これは、〔ロシアの〕大君主の大使と同行したアブライ=タイシャ(Аблай-тайша)の中国への使節団に加わっていた者である。そして、大君主の勤務員であるトボリスクのカザーク騎兵ペトル=シュカ=マリニン(Петрушка Малинин)が彼とタタール語で話した〔PKO XVII-1: 187〕。

すなわち、清側はモンゴル語を用いて、まず西モンゴルのホショートから使節団に同行した「ブハラ人」に用件を伝え、彼がそれをタタール語(テュルク語)に訳し、さらにそれをバイコフの随員がロシア語に訳す、という手順であった。こうした意思疎通の困難さを、使節団が見るべき成果を挙げえなかった一因と見る向きもある〔Яковлева 1958: 96-97; Скачков 1977: 20〕。

1670(康熙9)年にロシアのネルチンスク長官がミロヴァノフ(И. М. Милованов)を北京に派遣した際、康熙帝は満洲語・モンゴル語のロシア皇帝宛勅書を持たせて送り返した。勅書はネルチンスクでモンゴル語からロシア語訳されたが、その翻訳は、ネルチンスクにとって都合の悪い部分がいくらかごまかされている以外は、おおむね正確になされているという。ただし、ロシア政府は、勅書の内容がわからないという立場をとり、その真意を知ることの一つの理由づけとして、1675年にスパファリー(Н. Г. Спафарий)を使節として派遣する〔吉田1984: 110-113, 141〕。

## 1-2. 媒介言語に関する慣習の確立

1676(康熙15)年に北京に到着したスパファリーは、清側からロシア側へ送る文書には満洲語とラテン語、ロシア側から清側へ送る文書にはロシア語とラテン語を用いることを提案した〔満文俄羅斯檔: 満俄15: 238-246; 選編: 28; 吉田1984: 151〕。清側は同意し、以後、これが両国間の文書往復における原則となった。ラテン語が媒介言語として重要な役割を果たすようになった背景には、ロシア側の意向だけではなく、この時期にカトリック宣教師がふたたび清朝宮廷で活動するようになったという事情もあろう。ただし、清側は間もなく、ロシアへ送る文書に、ラテン語以外にロシア語訳を添付するようになった〔満

---

1 引用文中の〔 〕内は、筆者(柳澤)が説明のために補ったものである(以下同じ)。

文俄羅斯檔：満俄15: 6-7; 選編：42]<sup>2</sup>。さらに、1703(康熙42)年に至って、ネルチンスク長官は、ネルチンスクには満洲語・ラテン語を解する者がいないため、清側からネルチンスクへ送る文書にはラテン語の代わりにモンゴル語を用いることを要請し、清側はこれを認めた [満文俄羅斯檔：満俄2: 297-303, 311-324; 選編：215-217]。以上のような、中央レベルと地方レベルでラテン語とモンゴル語を使い分ける体制は、長期にわたって踏襲される。1689年のネルチンスク条約、1728年に交換されたキャフタ条約には、ラテン語・満洲語・ロシア語の条約文があるが、ネルチンスク条約の場合、双方がともに作成し、対校したのはラテン語のみである（末尾の【附表】を参照）。キャフタ条約の場合、清側もロシア語条約文を作成してロシア側に手交しているが、その内容はロシア側の作成したロシア語条約文とはかなり異なっており、ロシア側全権のウラディスラヴィチ（С. И. Владиславич）は、その存在をほとんど無視する態度をとった [吉田1974: 142-143; 澁谷2003]。一方、1727年に国境の現地で結ばれたブラ条約（国境画定に特化した内容で、後にキャフタ条約中に挿入）においては、清側は満洲語とモンゴル語の条約文を作成しており、上記の使い分けが援用されている。

## 2. 往復文書の翻訳システム

### 2-1. 清側

ネルチンスク条約前後から18世紀前半にかけての清側の翻訳システムは、中国第一歴史檔案館所蔵「満文俄羅斯檔」所収の往復文書に付された「内閣原注」によって知られる<sup>3</sup>。一例として、康熙55(1716)年にシベリア総督ガガーリン（М. П. Гагарин）から送られてきた文書に対する「原注」を挙げてみよう。

康熙55年12月25日に、蒙古衙門〔理藩院〕から上奏した上で送ってきたロシア語文書1件・ラテン語文書1件・押印した掲帖1件を合わせて送ってきたのを、侍読学士 Injana・Nayan……らが受領し、大学士 Maci に見せた上で、ラテン文を欽天監監副 Ji Li An [Kilian Stumpf]・西洋人 Ba Da Ming [Dominique Parrenin] に渡して翻訳した。ロシア文を小領催 Kusima・Yag'ao に渡して翻訳し、ともに清書して摺子を作り、大

2 冒頭に「康熙15年」とあることから、『選編』はこの記事を康熙15(1676)年に配列しているが、筆者は、これを康熙22(1683)年のアルバジンへの文書送付にかかわる記事と推定した [柳澤1990: 76-77]。ただし、清側の作成したロシア語は、レベルの高いものとは言えなかったようである。たとえば、1731年にイルクーツ副総督ジョロボフ（А. Жолобов）は、清側から送られてきたロシア語文書について、意味が分明でないと述べている [柳澤2003: 30]。

3 「満文俄羅斯檔」の全体像については、柳澤 [2001] を参照。この文書群に収められているのは、基本的にロシアから送られてきたロシア語・ラテン語文書の満文訳と、ロシアへ送る文書の満洲語原本の控えである。なお、「内閣原注」という呼称は、『選編』の用法に基づく。

学士 Maci に見せた上、康熙56年正月初3日に、大学士 Maci が、清書したロシア文〔を翻訳した〕摺子1件・ラテン文〔を翻訳した〕摺子1件・もとの文書2件を、みな1つの函に併せて入れて、事を転奏する Šuangciowan・Jang Wen Bin・Yang Wan Ceng に渡して転奏したところ、同日、旨は「わかった。該部に交付せよ」とあった。そこで同日、翻訳して作った摺子2件と旨を併せて、みな蒙古衙門の主事 Tujen 自身に渡した〔満文俄羅斯檔：満俄20: 422-424〕。

このように、ロシア側からの来文は、窓口である理藩院・黒龍江將軍等から内閣に送付され、カトリック宣教師と、鑲黃旗満洲のロシア＝ニルに編成されていた「アルバジン人」が満洲語に翻訳し<sup>4</sup>、大学士等が閲覧した後、皇帝に奏呈された。なお、上の引用中には明記されていないが、この翻訳作業を蒙古房（蒙古堂）が所管していたことは、他の「原注」の内容を総合的に勘案すれば、まず疑いない。一方、ロシアへ送る行文の場合は、侍読学士等が満洲語で起草し、皇帝の裁可を得た後、翻訳が行われ、理藩院・黒龍江將軍等を経由して発送された。文書の名義が黒龍江將軍のような地方当局であっても、起草や翻訳は常に内閣で行われた〔柳澤2001: 47-49〕<sup>5</sup>。嘉慶『大清会典事例』巻12「繙訳外藩各部落文字」に、

内扎薩克及喀爾喀四部落・阿拉善・額濟納・青海蒙古、用蒙古字、科布多・伊犁之杜爾伯特土爾扈特和碩特、用托忒字、各回部用回字、西藏用唐古特字、俄羅斯用俄羅斯字、緬甸南掌用緬字、西洋諸国用拉体諾字。遇有陳奏事件及表文、皆由蒙古房訳出具奏。其頒發誥勅及勅賜碑文扁額……皆繙出繕写。蒙古字以竹筆書之、托忒字回字唐古特字俄羅斯字緬字、各待該館人至蒙古房訳写、拉体諾字、伝西洋堂人訳写。

内ジャサクおよびハルハ四部落・アラシャン・エジナ・青海モンゴルはモンゴル文字を用い、コブドとイリのドルバト・トルグート・ホシヨートはトド文字を用い、各回部は回字を用い、チベットはタングート字を用い、ロシアはロシア字を用い、ビルマ・ラオスはビルマ字を用い、西洋諸国はラテン字を用いる。上奏する案件や表文がある場合は、みな蒙古房で翻訳して上奏させる。また、発布する詔勅や、勅賜する碑文・

---

4 「アルバジン人」とは、1640年代以降のアムール流域をめぐる紛争の過程でロシア側から清側に投じた人々と、その子孫を指す。彼らを母体として編成されたロシア＝ニルについては、劉 [2008] を参照。康熙20年代から46(1707)年までは、ロドホン (Lodohon) なる人物が翻訳にあたっている例が多いが、『八旗通志初集』巻3「旗分志」3の記載から、同人がロシア＝ニルに属していたことがわかる。康熙46年以降は、引用史料に見える Kusima, Yag'ao の名が多く現れるようになる。

5 ただし、モンゴルの地方当局（18世紀初～中葉においてはトシェート＝ハン、1760年代以降はフレエ〔庫倫〕辦事大臣）からシベリアの地方当局に送る文書の場合は、現地で起草されたようである。この点については、別の機会にあらためて検討したい。

扁額……は、みな訳出して清書する。蒙古字は竹筆で書き、トド字・回字・タンゲート字・ロシア字・ビルマ字は、それぞれ当該の館の人が蒙古房に来るのを待って翻訳させ、ラテン字は西洋堂の人を呼び出して訳出させる。

とあるように、内閣蒙古房は、モンゴル語にとどまらず、清帝国で使用される諸言語の翻訳センターとして発展を遂げていくが、ロシア語もまた、蒙古房の所管する翻訳システムの一部を構成したのである。ただし、ロシアとの往復文書に関して、各言語のテキストを厳密に対照した研究はこれまでになく、翻訳がどの程度正確に行われていたか、精査する余地がある<sup>6</sup>。

ところが、18世紀に入ると、ロシア語の翻訳に当たっていた「アルバジン人」の世代交代が進み、翻訳に当たる人材が乏しくなってきた。それについて、「内閣原注」に翻訳者としてしばしば登場する Kusima<sup>7</sup>らは、康熙50(1711)年3月に次のように述べている。

私 Kusima らは、京城で生まれた子供であります。以前、ロシアの文書が届いたときは、みな古くからいる年老いたロシア人に尋ねて翻訳しておりました。いま、古くからいる年老いたロシア人は次々とみな亡くなりました。ロシアの事は、関わるところが重大であります。もしまたロシアの文書が届いたとき、わからない言葉があつて、翻訳できないことを恐れます [満文俄羅斯檔：満俄4: 41-42]。

さらに後の時期になると、「アルバジン人」ではなく、ロシア正教北京ミッシヨンの関係者が翻訳に従事する例が現れる。1733年に伝書使として北京を訪れたペトロフ (С. Петров) は、次のように伝えている。

ロシア帝国元老院宛のムンガル庁 [理藩院]……からの公文や、辺境のロシアの長官たち宛の諸事に関する書簡を満洲語からロシア語に通訳したり、また受け取ったロシア元老院からの公文や辺境の長官たちからの書簡をロシア語から満洲語に通訳するのは、ロシア人の書記オシプ=ディヤコノフ (Осип Дьяконов) である (なぜなら、彼

6 『故宮俄文史料』には、同一の文書について、ロシア語原文書と満洲語訳の双方の影印が収載されているものがあり、『選編』にも、同一の文書について、しばしばラテン語・ロシア語原文書からの漢訳と、満洲語訳からの漢訳の双方が収載されているが、概括的にいうと、ロシアから送られたロシア語・ラテン語の原文書に対し、満洲語訳は総じて短く、翻訳に際してかなりの省略が施された可能性が高い。

7 ロシア側史料によれば、Kusima のロシア語名は Козьма Дмитриев である [PKO: XVIII-5: 731]。「内閣原注」によれば、同人は乾隆2 (1737) 年まで翻訳の任にあたっている [満文俄羅斯檔：満俄24: 27-34]。

は満洲語を話す、書くことはできないからである)。この人物は、北京の古いニコライ聖堂の近くに長年にわたって住んでいるが、何年からの地に住んでいるかはわからない。ただ、聞くところでは、彼は以前の掌院(この人物は中国で死去した)とともに、当時シベリアに総督として在任していたガガーリン公によって1713年に派遣されたのだという [АВПРИ: Ф.62, Оп.1, г. 1733, № 8: л.57]。

ここで言及されている「以前の掌院(архимандрит)」とは、「アルバジン人」の信仰維持のために送られたレジャイスキー(И. Лежайский)を指すが、同人の派遣に関する史料からは、確かに随員としてディヤコノフという下級聖職者があり、レジャイスキーが1718年に死去した後も北京に残留したことが知られる [Widmer 1976: 39-45; Скачков 1977: 37]<sup>8</sup>。

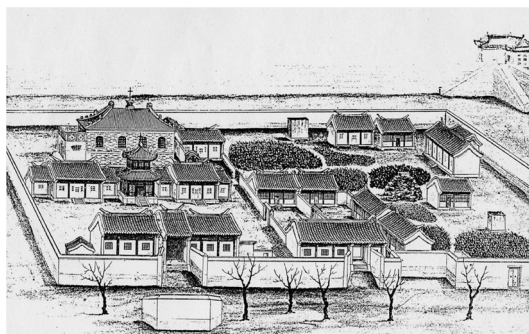


図1 ニコライ聖堂(俄羅斯北館)の図  
[Н. И. Веселовский ред. Материалы истории  
русской духовной миссии в Пекине. Вып.1.  
С.-Петербург, 1905]

## 2-2. ロシア側

外務参議会(Коллегия иностранных дел)の設立(1720)以前の文書は、ロシア国立古文書館(РГАДА)に保管されているものもあるが、後述する一連のラテン語原本を除けば、ほぼロシア語(来文の訳文と行文の写し)に限られている。清側に発送の記録があるのに、該当文書が見出せないものもある。そのため、当時の翻訳の実態を明確に再構成することは困難だが、満洲語の読解は不可能で、翻訳は主にラテン語から行われたと見られる<sup>9</sup>。そうした中で、1704(康熙43)~1717(康熙56)年のラテン語原本(34件)がまとまって残っていることが目を引く [РГАДА: Ф.62, оп.1, р.3, г.1704, д.2]。この一群の文書の冒頭には、1759年7月付のシベリア総督ソイモノフ(Ф. Соймонов)から外務参議会への報告が添えられており、それによれば、これらの文書は、同年4月にトボリスクの総督府の保

8 スカチコフ [Скачков 1977: 42] によれば、同人は後述する内閣俄羅斯文館でのロシア語教授にもあたったという。史料中に見えるニコライ聖堂とは、ロシア=ニルの所在地である北京内城の東北角にあった聖堂で、「俄羅斯北館」とも呼ばれた【図1】。

9 たとえば、1692年に清側からネルチンスク長官に宛てたラテン語・満洲語文書各3件がモスクワに届いた際、使節庁(Посольский Приказ)ではラテン語からのロシア語訳のみが作成された [РГАДА: Ф.62, Оп.1, р.2, г.1692, № 2: 1]。

管文書中から見出されたものであるという。原本がトボリスクに残されていたことは、当時のシベリア当局が、中央政府から半ば自立した形で対清外交を進めていた可能性を示唆する。1711年からシベリア総督として独裁的な権力をふるったといわれるガガーリン<sup>10</sup>との関係も注目されるが、そうした観点からロシアの対清外交を検討した研究はほとんど見られず、今後の課題とするしかない。一方、外務参議会設立後については、ほぼすべての文書がロシア帝国外交文書館（АВПРИ）に保管されているが、1741年までは必ずラテン語からのロシア語訳が付されており、満洲語や清側作成のロシア語テキストが重視されていなかったことを窺わせる。

### 3. 翻訳者の養成

#### 3-1. 内閣俄羅斯文館

上述のように、18世紀初めにはロシア語翻訳者の不足が強く懸念されるようになったため、清朝は組織的な翻訳者養成に着手した。それが、康熙47(1708)年の内閣俄羅斯文館の設立である。この学校の設立の経緯と初期の状況については、「満文俄羅斯檔」中の1冊（満俄4）に詳しい記載があり、張玉全によってその概要が紹介され、筆者も若干の検討を試みたことがあるので〔張1944; 柳澤1990〕、ここでは詳述しない。清朝は、蒙古官学・唐古特学・托忒学など各種の語学学校を設けたが、俄羅斯文館は、規模が大きかったこと、康熙帝が設立に積極的に関与したことにおいて、特異な存在であったといえる。ただし、この学校は、同知元(1862)年の同文館設立まで存続し、その間にロシア語翻訳の重要性がしばしば提起されたにもかかわらず、実務に活躍するレベルの翻訳者養成は難しかったようである。その実情についてはさらなる検証が必要であろうが<sup>11</sup>、特に深刻だったのは、ロシア語を教授する人材の問題である。たとえば、乾隆22(1757)年5月に、大学士フヘン（傅恒）らは次のような上奏を行っている。

康熙年間立学、設教習二人、将俄羅斯佐領下庫錫瑪、雅稿挑取。……後因俄羅斯佐領下無堪充教習之人、即以下官学生暫行管理。応請立定章程、五年一考、列一等等者作八品、二等等者作九品。教習缺出、即以考授八品官学生、奏請充補、候陞主事。以学生優劣、定教黜陟。

10 同人は1718年に召還されて取り調べを受け、種々の不正・汚職の罪で1721年に処刑された〔Акишин 1996〕。

11 古くは、Dudgeon [1872: 26-27] が、自身の北京での見聞を交えて、俄羅斯文館に関する一定の記述を残している。Widmer [1976: 103-112] は、主としてロシア側の史料・文献によって俄羅斯文館の沿革を述べているが、正教北京ミッション関連の史料・文献をさらに精査すれば、より詳しい情報が得られる可能性があろう。また、王 [2001] は、中国第一歴史檔案館所蔵の俄羅斯文館関連檔案を多数発掘し、特に道光-咸豊年間の試験問題や管理運営などについて、種々の重要な知見を提示している。

康熙年間に学校を設立し、教習二人を設け、ロシア佐領のクシマ、ヤガオを採用した。……後に、ロシア佐領には教習できる者がいなくなったので、暫時官学生に管理させた。いま、規則を制定する必要があるので、五年に一回試験を行い、一等の者は八品とし、二等の者は九品とする。教習が空席になれば、八品の官学生の中から試験して選び、上奏した上で任命し、主事に昇進する候補とする。学生の優劣によって教習の昇降を定める [『高宗実録』卷539: 乾隆二十二年五月丁巳]。

ここに「暫時官学生に管理させた」とある「官学生」について、吉田金一は「ロシア人の留学生のこらししい」としており [吉田1974: 213]、筆者もかつてこの説に従ったことがあるが [柳澤1990: 84]、後述するイリのロシア語学校の事例と照らし合わせて考えれば、学生中の成績優秀者を教師に充てたと見るのが妥当である<sup>12</sup>。このような方法では、ロシア語力の大きな向上は望みえなかったであろう。なお、ロシア側の史料によれば、次節で触れるロシア人留学生も、確かに教授に関わったことがわかるが、それがどの程度継続的なものであったかは定かでない。

とはいえ、この時期の清側に、ロシア語の翻訳者・通訳として活動した人物が皆無だったわけではない。「内閣原注」からは、乾隆5(1740)年以降、主事 Fulehe という人物が翻訳に従事したことがわかる [満文俄羅斯檔: 満俄24: 41-44]。ロシア側の史料によれば、この人物はロシア語の文法書を満洲語に翻訳したという [Скачков 1977: 42]。また、彼は1757(乾隆22)年にロシアの伝書使ブラティシチェフ (В. Ф. Брагищев)、1763(乾隆28)年にクロポトフ (И. И. Кропотов) が北京を訪れた際にも、通訳にあたったことが知られる [РКО XVIII-6: 173-175, 184-187, 299]。おそらく俄羅斯文館出身者と見てよいであろう。

しかし、1805(嘉慶10)年にロシア大使ゴロフキン (Ю. А. Головкин) がキャフタからイフ・フレー (庫倫) を経由して北京に向かおうとしたとき、フレー辦事大臣ユンドンドルジ (Yundondorji 蘊端多爾濟) は、俄羅斯文館で学んだ通訳たちを北京から呼び寄せたが、彼らはロシア人の話すことを一言も理解できなかったため、翌日には送り返したという [Тимковский 1824: 71-72; Dudgeon 1872: 26]。

一方、地方レベルで見ると、乾隆57(1792)年に新疆のイリにロシア語学校が設けられたことが注目される。ただし、当初は北京の俄羅斯文館から教師が派遣されたが、その後は学生中の成績優秀者が教授を行う方式となったため、学習効果は挙げられなかったという [加藤2016: 124-125]。

---

12 後述するピチューリンも、学生中の優秀者が教授にあたるシステムであったと述べている [Бичурин 1906: 22]。



### 3-2. ロシアの北京留学生

ロシア側も、満洲語・漢語の翻訳者を養成する必要性を認識していた。1726-27(雍正4-5)年のキャフタ条約締結交渉の際、ロシア側全権ウラディ斯拉ヴィチ (С. Л. Владиславич) は、北京にあらたにロシア正教の教会を建立し、ロシアから聖職者を交代で派遣して管理させるとともに、学生を語学学習のために居留させることを提案し、条約に盛り込むことに成功した。ただし、留学生の派遣は、外務参議会がウラディ斯拉ヴィチに交付した訓令ではなく、宗務院 (Синод) の決定 (1725年8月4日付) [PKO XVIII-2: 61-62] に見えるので、当初から外交文書の翻訳者養成を目的としていたかどうかは明確でない。また、宗務院が指名したのは、モスクワのスラヴ-ラテン学校の学生中から選んだ2名だけであったが、使節団が北京に赴く間に人数が増え、結局3名が1727年に北京に到着し、さらに1729年には第二陣の3名が派遣された [Скачков 1977: 38-39; PKO XVIII-2: 546-548]。その後19世紀中葉に至るまで、留学生は絶えることなく送られ続け、中には北京で死去した者、学習成果の思わしくない者もいたが、1740年代からは、帰国して中央・地方で翻訳者として活躍する人物が少しずつ現れる。初期の留学生は、総じて漢語よりも満洲語を速くマスターしたようである。これは、漢字・漢語習得の難しさ以外に、清朝が対ロシア外交に用いる主要言語が満洲語であったことにもよると思われる。たとえば、1743年に伝書使として北京を訪れたショクロフ (М. Л. Шокуров) は、次のように伝えている。

北京在住のロシアの学生たち、アレクセイ＝ウラディキン (Алексей Владыкин) とイヴァン＝ブニコフ (Иван Быков) は、良好な状態のもとで暮らしており、中国の大臣たちから敬意と信頼を得ていて、大臣たちによって、ロシアとの国境をめぐる諸問題の翻訳や、かの地の中国人の若者たちの教育のために用いられている。それゆえ私は、彼らはすでに完全に中国語と満洲語を読んだり書いたりすることができ、また満洲語をロシア語に、またロシア語を満洲語に自在に翻訳できると信ずる。なぜなら、私が中国の大臣たちや、彼らのもとから遣わされてきたザルグチェイ<sup>13</sup>や随員たちと会話したとき、この学生たちは、満洲語や中国語から見事に通訳を行ったからである。ただ、中国語からロシア語への翻訳ができるかどうかは、私には確実にはわからない。というのは、かの地では中国語はたまにしか使われず、満洲語がより多く用いられているからである [АВПРИ: Ф.62, Оп.1, г.1743, №5: л.57]。

この記事から、留学生たちが、公文書の翻訳や、ロシア語教育——疑いなく内閣俄羅斯文館での——にも従事していたことが知られる。

13 заргучей. モンゴル語の *jarγuči* に由来する語で、司官 (郎中・員外郎) クラスの官員を指す。

一方、第9次北京ミッション(1807-21)の団長であったビチューリン(И. Я. Бичурин / Иакинф)は、漢語にも熟達し、帰国後『漢文啓蒙』(Китайская грамматика)を著した[Скачков 1977: 114]。この時代以降になると、彼以外にも、北京ミッションの聖職者中に、満洲語や漢語に通じ、中国学・満洲学・モンゴル学などを研究する学者が現れる。第12次ミッション(1840-49)のメンバーであったカファロフ(П. И. Кафаров / Палладий)や、第8次ミッションに学生として加わり、後に第10次ミッション(1821-30)の団長となったカメンスキー(П. И. Каменский)などは、その代表的な人物である。

#### 4. 満洲語の時代

18世紀前半までは、前述のように、両国間の外交の主要な媒介言語はラテン語とモンゴル語であった。しかし、北京に留学していたロツソヒン(И. К. Россохин)が1741年末に帰国すると、事情は一変する。翌1742年1月にサンクト＝ペテルブルクに届いた清側の一文書[АВПРИ: Ф.62, оп.1, г.1741, №8]には、ラテン語・満洲語双方からのロシア語訳が付され、後者には「イラリオン＝ラツソヒン[ロツソヒン]が訳した」との注記がある。そして、この時期を境に、ラテン語からのロシア語訳は次第に作られなくなっていく。それでも、ロシアの中央政府から清側へ送る文書には、従来どおりラテン語が添付されたが、対面での重要な交渉においては、留学生出身者が満洲語で通訳する機会が増えた。たとえば、1768(乾隆33)年のキャプタ条約追加条項をめぐる交渉の際は、レオンティエフ(А. Л. Леонтьев)が通訳をつとめ、会談が主に満洲語で進められたこと、追加条項の文案についても、満洲語テキストが双方で作成され、読み合わせが行われたことが確認できる[柳澤2003: 30-31]。1805-06(嘉慶10-11)年にゴロフキンが大使として派遣された際も、留学生出身のウラディキン(А. Г. Владыкин)<sup>14</sup>が満洲語通訳として随行した[Скачков 1977: 82]。また、シベリアの地方当局からフレーの辦事大臣に宛てた文書に、しばしば満洲語が用いられたことも、中国第一歴史檔案館所蔵の檔案から確かめられる<sup>15</sup>。かくして、18世紀後半には、満洲語が両国間の外交における主要な媒介言語としての地位を占めるようになった。1804年に長崎に来航したレザノフ(Н. П. Резанов)は、アレクサンドル1世の国書のロシア語原本と日本語訳以外に、満洲語訳をも持参したが[高田屋嘉兵衛展実行委員会編2000: 84]、その背景には、このような事情があったと考えられる。

ただし、ロシア側が満洲語のリテラシーを高めたことは、それまで翻訳を通じて曖昧にぼかされていた問題が、かえって表面化することにもつながった。両国間の外交は、実務レベルではおおむね対等の立場で行われていたものの、清側は往復文書の書式や措辞にお

14 3-2で引用した史料中に登場するウラディキンとは別人である。

15 1779年5月29日付のイルクーツク総督からフレー辦事大臣宛の文書[滿文録副奏摺: 檔号2789-15/胶片号116: 1220-1221]は、ロシア側の作成した満洲文の一例である。ただし、全体として見ると、このように満洲文が存在する例は少なく、ロシア文とモンゴル文が多数を占めるようである。

いて、ロシアを下位に置くような種々の仕掛けを施しており、一方のロシア側は、少なくとも清朝を対等に扱う姿勢を堅持していた。ラテン語やモンゴル語を媒介すれば、こうした齟齬は目立たずに済んだが、ロシア側が満洲語のニュアンスを直接に理解できるようになると、ごまかしが難しくなったのである。たとえば、上述のレオンティエフは、キャフタ条約の満洲文本を1756年に点検し、次のように述べている。

同条約のロシア語およびラテン語には、「ロシア皇帝」(Императрица Российская)と書かれている。一方、もとの満洲語には、また〔理藩〕院から元老院宛の公文、さらにロシア語およびラテン語から満洲語への翻訳には、カトゥン=ハン (katun han) と書かれている (ハンには点が付されている)<sup>16</sup>。

カトゥンは、モンゴル語で、公爵夫人、王女、王妃を意味する。

点のないハンは、満洲語およびモンゴル語で、ツァーリを意味する。

点を付したハンは、文字それ自体としては何の意味も持たない。しかし、ツァーリという語に用いられた場合は、付された点によって、保護下にあるツァーリという意味になる [АВПРИ: Ф.62, Оп.1, г.1756, № 1: лл.1-1об.]。

こうした認識のもとに、レオンティエフが通訳として参与した1768年のキャフタ条約追加条項締結交渉の際、ロシア側は満洲語条約文において皇帝 (императрица) に対して imperaterits'a という音訳を用いた。これは清側の反発を買い、条約文の確定・交換に至るまでに一連の紛糾があった [柳澤2003: 24-25]。しかし、その後においても、ロシア側が作成した満洲語文書や、清側がロシア文から翻訳した満洲文の中に、しばしば imperaterits'a や impiyator という語が見えることからすれば、清側も結局はロシア側がこの表現を用いることを容認したようである。満洲語として意味を持たない音訳の使用は、確かに双方の体面を傷つけないための一つの方法であったといえる。

## 5. 接壤地帯の言語状況

キャフタを中心に東西に延びるモンゴル-ロシア国境地帯では、越境・逃亡事件の処理や貿易などを通じて、双方の日常的な接触があったが、そこで用いられる主な言語は、18世紀後半以降においても、引き続きモンゴル語であった。国境を挟んで居住する現地住民の大半がモンゴル系であったことを考えれば、これは当然ともいえる。また、ロシア系住民の中にも、モンゴル語を解する者が少なくなかった [Namsaraeva 2014]。また、前述し

16 満洲語の正字法において、nを表す字に母音が後続する場合、左側に点を付すが、語末の場合や子音が後続する閉音節の場合、点を付さない。しかし、han という語に関しては、清朝皇帝以外のモンゴルや外国の君主を指す場合、点を付すのが通例であった。

た1805-06年のゴロフキン使節団には、満洲語以外にラテン語・モンゴル語の通訳が随行しており、フレール当局との交渉は主としてモンゴル語を介して行われた。

一方、キャフタ貿易の主な担い手であった山西商人は、ロシア側との取引の際にロシア語を用いたが、それは独特な発音の Pidgin Russian であった。1821(道光元年)年に北京からウルガ(フレール)を経由してキャフタに向かったピチューリンは、次のように伝えている。

〔ウルガにある〕ほとんどの店の者は、ロシア語を話すことができる。中国商人の言によれば、キャフタの買売城の状況は次のようなものだという。すなわち、店に採用された少年は、最初の2年間、絶えずロシア語の会話や、また特に商売に関する単語を習う。2年経ってもものにならなければ、中国に送り返される。しかし、彼らは会話を実践によってではなく書いたものによって学ぶので、発音が不正確で、慣れないと理解するのに非常に苦勞する。わが方の商人たちは、中国人の不正確な発音を直すのではなく、彼らに合わせるようにしている。そこから、キャフタのわが商人たちと中国人たちの間で話されるくずれたロシア口語が生まれた [Бичурин 2010: 106]。

また、この Pidgin Russian が、語彙や文法の面で、モンゴル語の影響を強く受けていたことも指摘されている [Namsaraeva 2014]。

このように、当時のフレールやキャフタには、多言語が共存し、清側・ロシア側双方の人々がコミュニケーション能力を磨くのに好適な環境が存在していた。上記のピチューリン一行と会見したフレール辦事大臣ユンドンドルジは、満洲・モンゴル・漢の三種の言葉を操りながら、北京のロシア人留学生と、ロシア語を学ぶ(内閣俄羅斯文館の)満洲人たちを、ともにフレールに移して一緒に勉強させた方が、より成果が挙がるだろうと述べたという [Бичурин 2010: 104]。

一方、1835年に、ピチューリンの尽力によってキャフタに漢語学校が開校されたこと [Скачков 1977: 108-115] は、この時期には漢語の必要性に対する認識も高まっていたことを窺わせる。さらに、19世紀後半には、新疆方面でも両国の接触が密接化するが、この地域でのオーラル=コミュニケーションがどのような言語によって行われたかは、今後の検討課題である。

## むすび —— 満洲語から漢語へ ——

19世紀には、満洲語に代わって漢語の比重が増してくるが、そのプロセスについては、なお検討すべき課題が多い。総じていえば、1850年代までは、主要な媒介言語は引き続き満洲語であったといえる。張徳澤 [1939] は、軍機処の保管していたロシア関係文書に関して、嘉慶年間までは満洲文で、道光以降は、摺諭(上奏文)を除き「皆漢文」であ

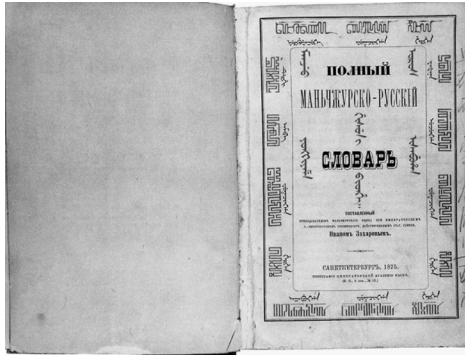


図2 ザハロフ『満露辞典』[Захаров 1875]の扉  
 (黄潤華主編『国家図書館蔵満文文献図録』国家図書館出版社、2010: 63)

ると述べている。しかし一方、「満文俄羅斯檔」には、道光・咸豊年間のロシアとの往復文書を収録する檔冊が3冊あり、年代の下限は咸豊3(1853)年であるが、注記のみ漢文で、本文は満洲語である。【附表】にあるように、1851(咸豊元)年のイリ通商条約では、ロシア側がロシア語、清側が満洲語の条約文を作成して交換したが、通訳には、第12次正教ミッシヨンの学生として北京で学び、満露辞典 [Захаров 1875] 【図2】を著したザハロフ (И. И. Захаров) があつた。条約締結後、彼はそのままイリ (クルジャ) に領事として残留した [Скачков 1977: 154]。ちょうどこの時期にイリ將軍をつとめたジャラフンタイ (Jalafuntai 扎拉芬泰) の奏摺が、「伊犁奏摺」と題して天理図書館に保管されている [野見山1966, 1969; 加藤2016: 156-189]。「伊犁奏摺」所収の奏摺は、全体として見ると漢文が過半を占めるが、ロシアに関係するものは満洲文であり、ザハロフと清側が満洲語によって種々の交渉を行っていた状況を反映すると考えられる。1858(咸豊7)年のアイゲン (愛琿) 条約では、条約文は満洲語・モンゴル語・ロシア語で作られている。このとき通訳にあつたのは、後にウルガ領事をつとめるシシマリヨフ (Я. П. Шишмарёв) で、主な媒介言語はやはり満洲語であつた [Невельской 2009: 348-350]。同年の天津条約の場合、主に通訳にあつたのは、第13次北京ミッシヨンの学生フラポヴィツキー (М. Д. Храповицкий) 等で [陳2008: 427-428, 448]、満洲語・ロシア語・漢語で作成された条約文には、満洲語を正文とすることが明記されている [PKO 1689-1916: 34]。この時期になると、清朝の行政用語全体としては、漢語の占める比重が大きくなってははざであるが、ロシア側が満洲語をより得手としたために、清側もそれに合わせて満洲語を用いたものと考えられよう。ところが、2年後に結ばれた北京条約においては、条約文はロシア語と漢語のみである。これは、主として通訳にあつたタタリノフ (А. А. Татаринов) が、第12次北京ミッシヨンの医師として参加した人物で、漢方への関心が深く、むしろ漢語を得意としていたこと [Скачков 1977: 153] と関係するかもしれない。しかし、清側が、それまで一貫して条約文に用いられてきた満洲語を外すことを容認した経緯については、精査を要する。また、北京条約については、ロシア語と漢語のテキストの間に食い違いがあることが指摘されているが [矢野1944]、そうした事例が他にも見られるかどうか、ある

とすればその原因は何か、諸条約のテキストを精密に比較し、検証していく必要があるだろう。

いずれにせよ、北京条約締結後に、総理各国事務衙門と、同衙門附属の外国語学校である同文館が設立されたことは、清朝の対欧米外交の枠組みに大きな変化をもたらし、それまで特異な存在であった対ロシア外交が、全般的な「洋務」に統合されていく趨勢をもたらした。この時期以降の状況については、稿をあらためて検討を加えることにしたい。

附表 清－ロシア間の条約文の言語

条約名	締結年	清⇒ロシア	ロシア⇒清
ネルチンスク条約	1689	ラテン、満洲	ラテン、ロシア
ブラ条約	1727	満洲、モンゴル	ロシア、モンゴル
キャフタ条約	1727	ラテン、満洲、ロシア	ラテン、ロシア
キャフタ条約追加条項	1768	満洲、モンゴル	満洲、ロシア
キャフタ市約	1792	満洲、モンゴル	満洲、モンゴル、ロシア
イリ通商条約	1851	満洲	ロシア
愛琿条約	1858	満洲、モンゴル	満洲、ロシア
天津条約	1858	満洲、ロシア、漢	
北京条約	1860	ロシア、漢	
サンクト＝ペテルブルク条約	1881	フランス、ロシア、漢	

## 【史料・史料集】

АВПРИ: Архив внешней политики Российской Империи

РГАДА: Российский государственный архив древних актов

РКО 1689-1916: Русско-китайские отношения: 1689-1916: Официальные документы. Москва, 1958

РКО XVII-1: Русско-китайские отношения в XVII веке: Материалы и документы: том 1, 1608-1683. Москва, 1969

РКО XVIII-2: Русско-китайские отношения в XVIII веке: Материалы и документы: том 2, 1725-1727. Москва, 1990

РКО XVIII-5: Русско-китайские отношения в XVIII веке: Документы и материалы: том 5, 1729-1733. Москва, 2016

РКО XVIII-6: Русско-китайские отношения в XVIII веке: Документы и материалы: том 6, 1752-1765. Москва, 2011

故宮俄俄文史料：『故宮俄文史料：清康乾年間俄國來文原檔』國立北平故宮博物院、1936

滿文俄羅斯檔：中国第一歷史檔案館 內閣全宗「滿文俄羅斯檔」

滿文録副奏摺：中国第一歷史檔案館 軍機處全宗「滿文録副奏摺」

選編：中国第一歷史檔案館編『清代中俄關係檔案史料選編』第一編、中華書局、1981

## 【参考文献】

- 加藤直人2016：『清代文書資料の研究』汲古書院
- 高田屋嘉兵衛展実行委員会編2000：『豪商 高田屋嘉兵衛』
- 野見山温1966, 1969：「咸豊年間伊犁における露清外交関係満文資料とその研究」I・II『福岡大学  
研究所報』8, 11 [再録：『露清外交の研究』酒井書店、1977]
- 澁谷浩一2003：「キャプタ条約締結過程の研究：国境貿易条項の成立と清側ロシア文条約」『人文学科  
論集』（茨城大学人文学部紀要）40
- 柳澤明1990：「内閣俄羅斯文館の設立について」『文学研究科紀要』（早稲田大学大学院）別冊16, 哲学・  
史学編
- 2001：「中国第一歴史檔案館所蔵のロシア関係満文檔案について」『滿族史研究通信』10
- 2003：「1768年の「キャプタ条約追加条項」をめぐる清とロシアの交渉について」『東洋史研究』  
62-3
- 矢野仁一1944：「清代満洲を繞るロシアとの国境問題交渉」『清朝末史研究』大和書院 [再録：英修道・  
入江啓四郎監修『中国をめぐる国境紛争』巖南堂書店、1967]
- 吉田金一1974：『近代露清関係史』近藤出版社
- 1984：『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』東洋文庫近代中国研究センター
- 劉小萌2008：「清代北京の俄羅斯旗人」細谷良夫編『清朝史研究の新たなる地平』山川出版社
- 蔡鴻生2006：『俄羅斯館紀事』（増訂本）中華書局
- 陳開科2008：『巴拉第与晚清中俄關係』上海書店出版社
- 王智仁2001：「清代内閣俄羅斯文館之研究」（淡江大学俄羅斯研究所碩士班碩士論文）
- 張德澤1939：「故宮文獻館所蔵之清代外交史料」『輔仁学誌』8-2 [再録：中国第一歴史檔案館編『明  
清檔案論文選編』檔案出版社、1985]
- 張玉全1944：「俄羅斯館始末記」『文献專刊』1944 [再録：『文献特刊論叢專刊合集』台聯国風出版社、  
1967]
- Dudgeon, J. 1872: *Historical Sketch of Ecclesiastical, Political and Commercial Relations of Russia with China.*  
Peking
- Namsaraeva, S. 2014: "Border Language: Chinese Pidgin Russian with a Mongolian 'Accent'." *Inner Asia* 16-1
- Widmer, E. 1976: *The Russian Ecclesiastical Mission in Peking during the Eighteenth Century.* Cambridge  
(Massachusetts) and London
- Акишин, М. О. 1996: *Полицейское государство и Сибирское общество эпоха Петра Великого.*  
Новосибирск
- Бичурни, Н. Я. 1906: *Описание Пекина.* Пекин
- 2010: *Записки о Монголии.* Самара [初版：Санктпетербург, 1828]
- Захаров, И. И. 1875: *Полный манчжурско-русский словарь.* Санктпетербург
- Невельской, Г. И. 2009: *Подвиги русских морских офицеров на крайнем Востоке России: 1849-1855.*  
Хабаровск
- Скачков, П. Е. 1977: *Очерки истории русского китаеведения.* Москва

『北東アジア研究』別冊第3号（2017年9月）

Тимковский, Е. 1824: Путешествие в Китай чрез Монголию, в 1820 и 1821 годах. Часть 2: Пребывание в Пекине. Санктпетербург

Яковлева, П. Т. 1958: Первый русско-китайский договор 1689 года. Москва

キーワード 清、ロシア、外交、リンガ・フランカ、ラテン語、満洲語、モンゴル語  
(YANAGISAWA Akira)